

JOI プログラム 第5期帰国報告特集

国際交流基金（ジャパンファウンデーション）日米センター（CGP）では、米国の中でも日本との交流の機会が比較的少ない地域において、日本への関心・理解を高めるとともに、地域に根ざした草の根交流を促進することを目的し、米国の非営利団体ローシアン協会と共同で「日米草の根交流コーディネーター派遣（Japan Outreach Initiative: JOI）プログラム」を実施しています。

今号では、今夏2年間の派遣期間を終えた第5期コーディネーターより、各派遣先での活動の様子をレポートしていただきました。

My sweet home Alabama

小島 祥子



派遣先：
アラバマ州バーミングハム
アラバマ日米協会
(The Japan-America
Society of Alabama:
JASA)

Time Flies! 今の心境に最もふさわしい言葉です。改めて思うと、振り返る暇もないほど、あっという間の2年間でした。

私はアラバマ日米協会でアウトリーチコーディネーターとして、教育・カルチャープログラムを担当してきました。主な仕事には“Japan in a Suitcase”という活動（日本の物が入ったスーツケースを持って学校・図書館などを訪問し「生活・食べ物」「学校生活」「年中行事」「昔話と遊び」などテーマに添った日本紹介のプレゼンテーション）の作成・実施と、「インターナショナルバザール」や「さくらフェスティバル」など地域のイベントへの企画・参加がありました。また2年目からはアシスタントティーチャーとして、週1回、アラバマ大学バーミングハム校の日本語クラスを手伝う機会にも恵まれました。

この2年間、本当に色々な経験をしましたが、特に印象に残っているものの1つに、セルマという州都モンゴメリーから車で約1時間のところにある小さな町で行なわれた“Voices from the Land of the Rising Sun”プロジェクトがあります。（セルマは、1965年、黒人の参政権を訴えた、キング牧師率いるモンゴメリーまで約80キロに及ぶ「自由の行進」の出発地点で、今でも公民権運動の聖地として有名です。現在も黒人人口が全体の約70%近くを占め、比較的低所得者の多い地域です。）

このプロジェクトは、ある中学・高校の先生たちが中心になって始まったもので、「生徒たちが日本について調べ、それを“Student Museum”として展示し、地域の人々に発表する」というものでした。私はアドバイザーとして6月上旬の企画段階から参加し、まずそれぞれの先生が、自分の担当教科にどのように日本を取り込めるか考えることから始めました。一言で日本文化と言えば、国際理解や社会科にしか当てはまらないような気がしますが、考え方によっては、甚やそろばん、日本とアメリカの吉数字・不吉数字の比較などを数学で、能や着物を演劇のクラスで調べたりと、色々な方法があります。9月には、より多くの学校にこのプロジェクトに参加してもらうため、地域の学校の先生を対象にワークショップを開きました。「アメリカと日本は思っていた以上に似ている点が多い」という感想が多かったのが印象に残っています。このように「日本文化・生活＝全く違うもの」ではなく、アメリカと共通点も多い点に気付いてもらえたことは、日本をより身近に感じ、興味を持ってもらうためには重要だと思います。

その後10月から12月にかけて、ワークショップに参加した先生の学校で“Japan in a Suitcase”を実施しました。「この子どもたちは、世界がすごく限られているから、色々な異なった文化や国を見せてあげたい。だから、これはとても良いプログラムだと思う」と先生に言ってもらえた時は、JOIの活動の重要性を再認識しました。

そうして2007年12月6日のMuseum オープン当日、会場の広いホールには、生徒たちが約4ヶ月間、一生懸命調べた内容と作品が展示され、約800名を超える来場者に、生徒たち自らが説明するツアーを行ないました。数ヶ月前に私のプレゼンテーションを聞いて、目を丸くしていた生徒たちが、自信満々に日本について説明する姿にとても感動したと同時に、無事にこの日を迎えられることに、私自身なんともいえない達成感を味わうことが出来ました。約半年にわたり一緒に取り組んできた先生たちは、今では仕事の付き合いを超えて、良い友達になりました。

JOIコーディネーターとしての任期終了を目前に控えたある日、アラバマ日米協会主催で送別会を開いてくださり、平日の夕方にもかかわらず、アラバマの方、日本の方、合わせて40名近くが集まってくださいました。2年前の日本出発当日、初めて家族と離れての海外生活や、どんな場所なのか分からない、知り合いが一人もいないアラバマ州に来ることに不安を覚え、少しブルーな気持ちになったことを思い出し、今はわざわざ私のために集まって、別れを惜しんでくれる友人がこんなに沢山いることに胸がいっぱいになりました。

この2年間、私は日本・日本文化を紹介するためにアラバマに来ましたが、逆に彼らから学ぶことも沢山ありました。改めて気付かされた日本の良さ、日本文化の素晴らしさもあります。しかし一番強く感じたことは「いつも誰かに支えられている」ということでした。右も左も分からないところから始まったアラバマ生活ではそれを常に実感する日々でした。私を受け入れるにあたり、色々な準備やサポートをしてくださったアラバマ日米協会の皆さん、いつも快く私の活動に協力してくださった日本人ボランティアの皆さん、いつも気にかけてくださったホストファミリー、楽しい時も辛い時もそばに居てくれた友達、そしてJOIの活動が問題なく運ぶようサポートしてくださった国際交流基金日米センターとローシアン協会の皆さん、多くの方に支えられてここまでやっていくことが出来ました。この2年間、お世話になった全ての方々はこの場をお借りしてお礼申し上げます。アラバマで得た経験、出会った人々は、人生において貴重な財産です。

私のこの2年間の活動が少しでも多く、アラバマ州と日本の友好関係を深めるために貢献できていたら幸いです。



小学校でランドセルと教科書を紹介

デルレイビーチでの2年間



折り紙ワークショップ

Expo 2005 愛・地球博での仕事を終え、日本と諸外国との懸け橋になれるような仕事を探していた私が国際交流基金のホームページで見つけたのが、JOIプログラムでした。

第5期コーディネーター採用が決まり、2006年4月末に参加したオリエンテーションで、私の派遣先がフロリダ州デルレイビーチにある「森上ミュージアム」になることがわかりました。フロリダは以前旅行したことがありましたが、オーランド、マイアミ、キーウエストに滞在したくらいだったので、デルレイビーチに日本文化に特化したミュージアムや広大な日本庭園があることなど、全く知りませんでした。早速ホームページを見てとても素晴らしい所に派遣されることがわかり、このチャンスは掴むべきだと確信しました。

森上ミュージアム内では、私は教育部に所属し、月に1度「ファミリーファン・プログラム」を担当して、来館者に折り紙を教えていました。2年間の間に17回のプログラムを行ない、約1,500人に様々な折り紙を紹介してきました。中でも母の日のカーネーションを付けたカードや、バレンタインのハート、作ってから遊ぶことが出来る吹きゴマ、跳び蛙、回転木馬などは人気がありました。リピーターも多く、2年前にはベビーカーで来ていた子どもが最近歩いてきたりして、とてもびっくりしています。

森上ミュージアムでは1月にお正月、2月に初芽、4月に子どもの日、8月にお盆という4大行事があります。お正月には、餅つきや獅子舞、琴や和太鼓の演奏、羽根突き、福笑い、お茶会等があり、私は書初めを担当しました。子どもの日には、子どもが楽しめる様々な遊びを用意します。私は、2年間とも約4メートルの巨大鯉のぼりを担当し、イベント当日、来場の方々が鱗一枚一枚に思い思いのデザインを施していただけるよう準備をしたり、前年同様に作成した巨大鯉のぼりをロビーに飾ったりしました。

その他、学校が夏休みの期間に行なわれる、「Summer Tour Plus」という特別プログラムのお手伝いなどもしましたし、ミュージアムにあるお茶室で、月釜のお手伝いもしました。帰国前の6月末には、今までの感謝を込めて、スタッフ全員と元ホストファミリーを招待してお茶会を開き、大変好評でした。

森上ミュージアム外では、幼稚園から高校までの教育機関や図書館、様々なコミュニティやサマーキャン

プを訪問し、日本文化を伝えるアウトリーチプログラムを行ってきました。2年間で延べ約1万人に接してきたと思います。紙芝居、折り紙、習字、箱庭作り、お茶文化の紹介、魚拓、凧作り、十二支、伝統的なおもちゃやゲーム、お面作り、日本人の衣食住の紹介など、内容は多岐に渡ります。中でも印象的なのは、Donna Klein Jewish Academy (幼稚園～高校の一貫校)での「Konnichiwa Japan」という継続的なプログラムや、アーティストの大森マリさんとあちこち出かけ、お茶に関するアウトリーチを行なったことです。各参加者に特製の紙にお茶の思い出等を書いてもらい、マリさんが後日ティーバッグをその紙に重ねコラージュしたものをミュージアムの壁に展示しました。

またデルレイビーチ市は京都の宮津市と姉妹都市ということから、交換留学生に日本文化を教えたり、翌年度の交換留学生選考委員になったりという仕事もありました。

この2年間で学んだことはたくさんあります。特にボランティア活動については、日本はアメリカから学ぶべきものがたくさんあると思います。日本と違い、スムーズに物事が運ばないことが多かったため、私にとっては、研修の時にたびたび言われた「Be flexible.」(臨機応変に行動する)ということが最大の教訓になりました。また「人生を楽しむ」ということが大切なことも教えられました。というのも、同僚にアウトリーチに行くことと告げるとたいていいつも「Have fun!」(楽しんできて!)と送り出してもらえるのです。仕事として教えるのではなく、自分も楽しい時間を過ごせば、相手も楽しくなっていくから、楽しんでとのことなのです。様々な価値観を知りました。

2年間フロリダで生活し、仕事をしたことによって、ただの旅行では出来ないことも色々体験し、多くのアメリカの良いところ、日本の良いところを再認識することが出来ました。友人知人も増え、私の貴重な財産となりました。幸運なことに今年の2月には日本男子テニス界の若手ホープ錦織圭選手の最初の国際大会での優勝試合を観戦することも出来ました。デルレイビーチに派遣されて本当に良かったと思いました。

最近いろいろな人から「We will miss you a lot. We are lucky to have you here for the past 2 years.」(あなたがいなくなると寂しくなるわ。2年間あなたがいてくれてとても良かった。)と言ってもらえて、とても幸せに感じています。この経験を活かし、今後も日本と諸外国との懸け橋になれるような仕事に従事したいと思っています。

最後にこのすばらしい機会を与えてくださった、森上ミュージアム、ローランシア協会、国際交流基金日米センターの関係者の皆様と2年間私を応援してくれた家族や友人知人の皆様に、この場を借りて心から感謝したいと思います。どうもありがとうございました。

JOIで出会ったたくさんの笑顔

織田 美千子



派遣先:
ウェストバージニア州ベサニー
ベサニー大学 (Bethany
College)

JOIのコーディネーターとしてウェストバージニア州のベサニー大学に派遣されました。有意義な2年間を過ごすことができたことに感謝し、これからも、日本人であることに誇りを持ちながら国際社会の一員として、外国の人々との交流や協調に関する仕事をしていきたいという思いを強めています。

ベサニー大学での私の仕事は、日本関連のアウトリーチ活動を立ち上げることでしたので、まずは、日本紹介をさせていただき訪問先を探すことから始めました。地域の学校など候補を調べてダイレクトメールを郵送したり、電子メールで活動内容をお知らせし、電話でフォローをしたりしましたが、当初は快く受け入れてもらえないことも多く、ストレスが溜まることもありましたが、それでも、訪問を快諾してくれる先生が見つかる、その先生を介して学校全体をターゲットにアウトリーチ活動をさせてもらったり、知り合いの先生の所属する別の学校を紹介してもらってアプローチしたりと、2年目からはぐっとネットワークを広げていくことができるようになりました。

日本文化に興味を持つ先生に出会えばラッキーです。私の活動に対しても積極的に協力して下さいますし、先生自身が継続的に生徒に日本を紹介することも可能になります。その一例が、今年の6月にK-12(幼稚園～高校)の先生方を対象に開催した「ジャパンインスティテュート」です。前半4日間はベサニー大学の宿泊施設に滞在して、朝早くから夜遅くまで日本に関する集中講義やワークショップに参加していただき、後半10日間は、名古屋での教育現場視察、ホームステイを中心に、大阪、京都、東京も訪問しました。終了後、彼らが見聞きした日本を生徒らと共有している様々な活動レポートが送られてきており、とても嬉しく頼もしく思っています。

アウトリーチのターゲットは、幼稚園児から100歳を超えるお年寄りまで様々でした。必然的にプレゼンテーションの内容も多岐にわたります。一例を挙げると、書道、生け花など日本の伝統文化に関わるものから、映画、アニメなどの現代文化、結婚式やお正月などの行事、さらには外交や宗教にいたるまで。もちろんそれぞれのテーマの専門家ではありませんので、深く踏み込んで解説することはできませんでしたが、自分なりに勉強してご紹介しました。不十分な英語を補うために、視覚的な資料を利用するよう心がけました。

2年間でアウトリーチした方々の延べ数は43,907人、月平均1,829人、日平均60人にもなります。自分に合ったやり方・自分のペースで、かつサイトのニーズを考慮しながら活動計画を練ったことが、良い結果につながったと思っています。アウトリーチの延べ数に大きく貢献したのは、任期中通算4回実施した和太鼓ツアーでした。ベサニー大学に語学留学した経験のあるプロの和太鼓奏者の方が助っ人になってくださり、州内はもちろん、時には近隣の州まで出かけて和太鼓の演奏と日本紹介のワークショッ

プを行ないました。どこに行っても和太鼓は大人気で、大人から子どもまで、多くの方に日本に対する関心・好感を持ってもらえたと思います。

和太鼓ツアーは、地道にK-12を訪問して日本紹介をしていく活動のほかに、何か期限限定の特別プログラムを加えたいと思ったことが始まりです。予算のない中、そのための資金調達は私にとって重要なテーマでした。助成金の申請などにはかなりのデスクワークも要求されます。単独での申請が難しい場合は、ツアー実行に協賛してくれる学校・先生方の協力を得られるよう努力しました。多くの協賛を得られれば、それだけ幅広いアウトリーチ活動ができるという魅力もあります。全てをコーディネートする作業は大変でしたが、大きなイベント開催に向けて一つずつ準備していくのは、わくわくする仕事でした。



観客もステージに上がって

私の活動の原動力は3つありました。1つ目は、自分の準備したことに対する評価を現場ですぐに確認できることです。頑張って準備すれば必ずそれが伝わります。子どもたちの眼が輝くのを見るとき、身を乗り出して質問をしてくるとき、「ありがとう」と感謝の気持ちを伝えてくれるとき。さらにその後も、参加者全員のサイン入りのお礼状が届いたとき、習字を額装して家に飾ったと写真が送られてきたとき、現地の先生が自ら日本について調べて予備授業してくれていたと知ったとき、子どもたちが家族に日本の話をしたと聞いたとき、折り紙を習った上級生が下級生に教えてあげているのを見たとき…。こんなとき、私のモチベーションはさらにアップします。

2つ目は、プライベート生活の充実です。ベサニーは田舎で何も無いという環境を逆手にとって、ここでしかできないことを積極的に楽しむことにしました。毎日欠かさず和太鼓とドラムの練習に精を出し、週末には乗馬を楽しみました。どれも、ベサニーに着任してから始めた手習いです。東京では考えられなかった自然の美しさも心をなごませてくれました。

3つ目は、様々な人たちに会える喜びです。異文化で育った人間同士が、相互の共通点や相違点を発見し、そのたびに驚きや興味が深まっていくという貴重な体験をしました。大人から子どもからもたくさんの刺激をもらうことができました。

最後になりましたが、関係者のみなさんのおかげで、2年間の任期を無事に終了することができました。いろいろとお世話をいただき本当にありがとうございました。

木谷 公子



派遣先:
フロリダ州デルレイビーチ
森上ミュージアム
(The Morikami
Museum and
Japanese Gardens)

JOI第5期 派遣先



第1～4期、及び現在派遣中の第6～7期の派遣先詳細については、こちらをご覧ください。
(<http://www.jpj.go.jp/cgp/fellow/joi/list.html>)

国際交流基金日米センター

Tokyo Office

〒160-0004 東京都新宿区四谷4-4-1
TEL. 03-5369-6072 FAX.03-5369-6042

New York Office

The Japan Foundation Center for Global Partnership, New York
152 West 57th Street, 17th Floor, New York, NY 10019 U.S.A.
TEL. 1-212-489-1255 FAX. 1-212-489-1344

コラムス vol.11

米国でも大都市部や東部・西海岸など、日本からの企業進出や観光客・留学生の多い地域に比べ、まだまだ日本との交流の機会が限られている地域が多くあります。今回は「日米草の根交流コーディネーター派遣（JOI）プログラム」第5期帰国報告をまとめ、米国の南部地域に派遣されたコーディネーターらの、様々な草の根交流活動をご紹介します。

My sweet home Alabama

アラバマ日米協会
小島 祥子



デルレイビーチでの 2年間

森上ミュージアム
木谷 公子



JOI で出会った たくさんの笑顔

ベサニー大学
織田 美千子



JOI プログラム 報告会・説明会を開催します。

今回レポートを寄せていただいた第5期の帰国報告会、2009年夏に派遣される予定の第8期募集説明会を開催いたします。プログラムの概要、説明会の詳細はこちらのウェブサイトをご覧ください。 <http://www.jpff.go.jp/cgp/fellow/joi/>

日米センター
(CGP: Center for Global Partnership)とは
日米が共同で世界に貢献し、緊密な日米関係を築くことを目的として、1991年に国際交流基金に設立されました。日米センターでは、両国のパートナーシップ推進のための知的交流と両国の相互理解を深めるための地域・草の根交流の分野で交流事業を行なっています。

編集 後記

今号はJOI特集として3名の第5期コーディネーターの方に米国での2年間の活動についてご寄稿いただきました。今夏からは、第7期コーディネーターとして4名の方が新しく派遣され、それぞれの地で活動を始めています。またコラムスの創刊から約2年を迎え、読者アンケートを実施する運びとなりました。いっそう内容を充実させるため、読者の皆様からのご意見・ご感想をお待ちしております。(nk)

本紙に関するご感想・ご意見をお寄せください。 日米センターURL:
E-mail cgpinfo@jpff.go.jp www.jpff.go.jp/cgp

2008年9月15日 発行/無料